

「マルチヴォーカル」の 視点を取り入れた 海外フィールドワークの 学習環境デザイン

明治大学 国際日本学部

岸 磨貴子(きし まきこ)

本研究の目的

- ❁ 「マルチヴォーカリティ(multi-vocality)」(Bakhtin, 1981)の概念を学習環境の要件として取り入れた海外フィールドワークの実践と評価
- 1. デザインされた環境における学生のマルチヴォーカルな学びのプロセスを明らかにする。
- 2. 学生の学びを促した要因を明らかにする。

研究の背景

- ❁ 短期海外研修プログラムの成果(工藤 2011)
 - ❁ 学習言語の運用能力や学習意欲の向上
 - ❁ 異文化への 適応力の向上
 - ❁ 滞在国および滞在国民へのイメージの改善
 - ❁ 国外での異文化体験を通じて日本人としての意識を再確認



学生が**自らの経験を積極的に解釈し、**
将来の経験につなげられるように
学習を支援することが重要(工藤2011)

文化を捉えるための認識論

- ❁ 客観主義と主観主義（箕浦 2012）
- ❁ 客観主義：現実社会を観察者と切り離し独立して捉えるため、「現実」には誰が見ても同じに見える本質的なものが存在していると見なす。
- ❁ 主観主義：観察者の視点を重視する。主観主義では、現実とは、観察者の見る視点によって様々な相貌をみせる多様なもので、どのような問いをたてるかで見えてくる現実が異なる

バフチンと多声

- ❁ 多声性とは、異なる志向性を持った複数の声の一つの声の中で対話的な関係にあることを意味する。
- ❁ 私達の言語活動は「人間のあれこれの活動領域の参加者たちの、個々の具体的な発話」の連鎖の輪 (Bafhtin 1988, p.155)
- ❁ バフチンは、発話の連鎖によって世界を捉えようと試みる。
- ❁ 発話は誰かの発話をふまえ、誰かへ向けられたものであるため、その誰かを意識したものにならざるをえず、一つの発話は必然的に他者の視点が入り込むことになる。

マルチヴォーカルな環境

- ❁ 一人ひとりの声が行き交い、異なる考え(＝声)に触れて自らの考えを見直すことが推奨される環境である(白水・遠山2012)
- ❁ フィールドワークにおいて、学生は、自らの観点を通して見えてきた現実を他の学生のそれと連関させることにより、その文化をより深く理解することができる。

フィールドワークの概要

- ❁ 京都のA大学の課外活動として
- ❁ 期間:2013年2月12日から15日までの4日間(マニラ滞在を含めて7日間)
- ❁ 参加学生:10名
- ❁ フィールド地:フィリピン ミンダナオ島

バトバト村社会養護施設 House of Joy
(HOJ)

- ❁ 目的:異なる観点でHOJを事例として、日本人が運営する現地NGO活動の現状を理解する

デザインの概要

- ✿ それぞれのテーマについて調査
- ✿ 対象は、立場の違う4つのHOJ関係者
 1. 日本人スタッフ(X)
 2. 現地人スタッフ(A and B)
 3. HOJの中学生(M・女14歳)
 4. HOJの小学生(J・女9歳)
- ✿ グループディスカッション(毎晩2時間)
- ✿ 個別の振り返り(eポートフォリオ)



マルチヴォーカル
な環境の中で、
「現実」を捉える。



研究の方法:対象

学生	学年	海外経験
ST(A)	4年生	タイ、インドネシア、インドでのFW経験あり
ST(B)	4年生	タイ、インドネシア、インドでのFW経験あり
ST(C)	3年生	英国留学経験あり、インドでのFW経験あり
ST(D)	3年生	タイ、フィリピン、インドでのFW経験あり
ST(E)	3年生	インドでのFW経験あり
ST(F)	3年生	インドでのFW経験あり
ST(G)	3年生	ドイツ留学経験あり
ST(H)	1年生	初海外経験
ST(I)	1年生	初海外経験
ST(J)	1年生	初海外経験

研究の方法 研究①

デザインされた環境における学生の マルチヴォーカルな学びのプロセス

✿ 収集データ

1. 振り返りにおける学生の発話データ
2. eポートフォリオの個々の学生の振り返り

✿ 分析方法

筆者が学生のマルチヴォーカルな学びがみられた事例を提示

学生が、事例を振り返り、自己の学びのプロセスを図示

2日目振り返りにおける発話

ST(E): 昨日食事の話がでたので、Xさん(日本人スタッフ)グループの私たちは、それについてXさんに聞いたのですけれど、何故分けているかというと、visitorがいなくても分けているようで、こっちの人が食べる食事はすごく塩辛い。日本人とあわない。子どもの食べているものを食べていると、こっちが不健康になってしまうから、病気になったからともともこないからまず、食事は一緒にしないというのがありました。Xさんは、野菜が好きだから、野菜ばかりをたべてるらしくほとんど肉は食べない。これも、△△さん(前任者)からやっていたみたいなんですけど、やっぱり、生活をわける。プライベートと生活を分けるということらしくって。なんか、食べているものも違うし、なんだろう、、ずっと、、お互いに気を使うわけではないけど、やっぱり、分けるべき、、、。

ST(B): それは、子どもとvisitorをわけるのか、子どもとXさんを分けるのかどっち？

ST(G): 子供とXさんをわける。子どもとスタッフをわける。

ST(E): ずっとそういうふうに、国際関係のボランティアをしている人って、そこにいはいいたらその生活をしないといけないって思いがちなんだけど。現地の人と同じ生活をするのは、いいことだけど、中にはあわない人もいるから、それを無理矢理しなくてもいい。そこでがんばってしまうと、無理をしてしまう。体のことであったり、食事なんかあわないとイライラしてきて、子どもやスタッフにあたるとともともこない。その部分をわけてしまって、他のことがうまくいくならそれでいいんじゃないかと思って、ごはんをわけている。食事の時間って大事。いろんな話ができることもあるけれど、他の部分でカバーができるからということでした。

2日目振り返りにおける発話

ST(F): Aさん(現地スタッフ)とかBさん(現地スタッフ)とか青とか赤とか色でわけれていてhouse parentsという役割があるみたいで、新しく入ってきた子とかがいれば、チームにわけられて、house parentsの人が、まず最初にこういう生活するって教えてくれる。お母さんみたいな。お母さんの役割みたいな人がいて、教えてくれる。

ST(I): parentsという名前がついてる。実際に、house parentsから料理とか食事とか、私たちがお母さんから学ぶことを学んでいる。おこったりもされるし、ほめられることもあるし、普通に良い関係にできているっていった。

ST(F): 職員と子どもという分けているイメージがあったけれど、そうではなかった。子どものインタビューを通して。

sT(B): となりで、チキンさばいていても、親子にみえるし、行動が自然だし、お母さんと息子みたいな。そんな風にはみえる。なんかくらいおこられた？っていったら・・・

eポートフォリオ

ナマステニランジャパン

サービスラーニングの実践

自分の成長

0

フィリピンで私は成長したことを実感していた。でも具体的に聞かれるとどこだろう？子犬が触れるようになったこと？って感じで具体的にはわからなかった。みんなで振り返りをする中でわかった。発言力、積極性がよくなっていた。発言力はなんとなくわかっていて気がするけれど積極性にはきづかなかった。自分が成長する過程に誰かが関わっていて気付くときに誰も関わっている。これは偶然で関わっているのだけどそれがなかったら全然違う方向に進んでいたかもしれない。自分が成長できたのもみんなのおかげなんだと実感した。私にとっては今回“継続の意味”について話せたことが良かった。とても悩んでいた。話した結果インドに行きたい気持ちが強くなった。むつみさんのリーダーとしての自分の話はこれからの私の参考になった。しかもこれにもやっぱり人が関わっていてあすかさんのその時の気持ちを聞いてそうゆう関係が築けてる先輩たちは単純にうらやましかった。言葉にしにくいがお互いを思いやるからこそ意見というのか.....これからリーダーになる私もみんなとこんな関係を築きたいと感じた。



Written by sayaka at 2013年5月15日

[Continue reading »](#)

さやかの日記

事後学習

0

フィルクでのフィリピンの事後学習をした。私ははじめ、フィルクに来る事さえ迷っていた。だって私はフィリピンに行けなかったから。私がいって、何ができるのかなって思ってたけど、先輩はおいでって言うてくださったので参加した。皆のブログは読んでいたけど、そうなんだ。で終わっていた。でもマコ先生は行ってない美穂だからこそ、気づけることや疑問を持つことができるって言うて下さって、すごく軽くなった。実際、私が役に立てたのかどうかはわからないけど、今までずっと私だけフィリピンの話になるといついけなかったりしたことが悔しくて、でも誰にも言えなくて悩んでいたからこの言葉にすごく救われた気がした。私は私ができることを探せばいいんだと思った。それからはブログを読み直して、皆の気持ちの変化とかにも気づけたし、例えばあやみとかずさんが密着していたジョリーナは、はじめ距離があるかんじだったのにどうして最後には自分からきてくれるようになったのか。それが気になった。ジョリーナの変化は二人がどう変わったからなのかとか考えていた。でもそこには想像もつかないことが起こっていたりして。きっとそこにはふたりの心の葛藤とか、思いとか、エピソードがたくさんつまっているんだと気づくことができた。それに、二回生の変化にもわたしは気づいていた。沙耶香は一

ブログロール

[引率者のプロフィール](#)

[活動写真2011年3月](#)

カテゴリー

[Makoの日記](#)

[あやみの日記](#)

[お知らせ](#)

[さやかの日記](#)

[まゆみの日記](#)

[インドの宗教](#)

[インドの食べ物](#)

[一葉の日記](#)

[志穂の日記](#)

[明日香の日記](#)

[未分類](#)

[村人の生活と農業](#)

[治子の日記](#)

[活動報告](#)

[温理の日記](#)

[男性の仕事、女性の仕事、子どもの仕事](#)

[真里菜の日記](#)

[睦美の日記](#)

[美穂の日記](#)

[装飾品](#)

[詩穂の日記](#)

研究の方法 研究②

学生の学びを促した要因

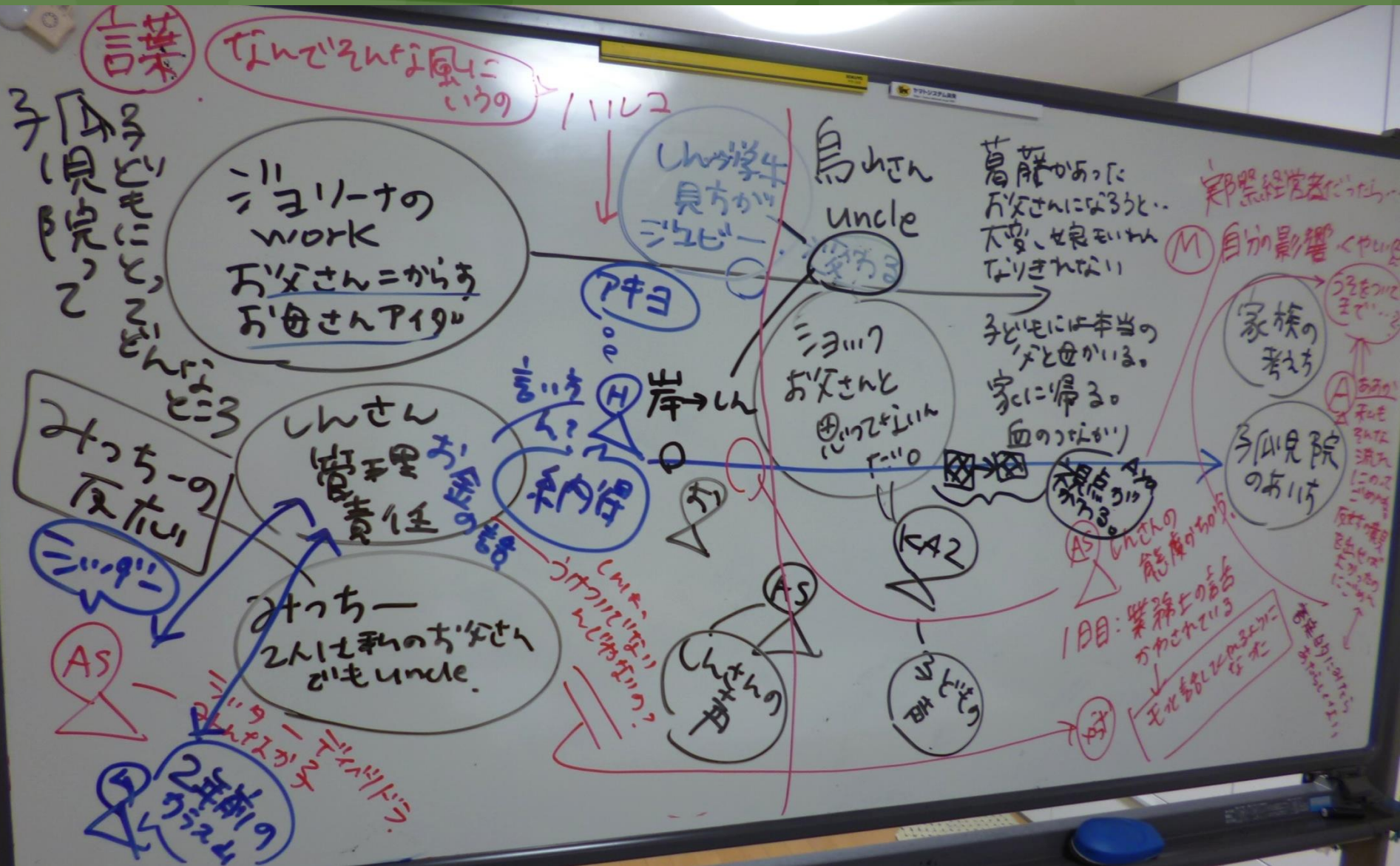
❁ 収集データ

- ❁ 学生による学びのプロセス図

❁ 分析方法

- ❁ 筆者と学生が、図示された学びのプロセスを要因を分析
- ❁ 了解性が得られた要因を、学習環境をデザインするための要件として提示(4名のみ確認のため、今回は中間報告)

学びのプロセスの図示



5事例を全員で分析し、その後、個別で振り返りし、
全員でグループディスカッション



自らの学びのプロセスを図示し、説明



学びを促す要因について事例と照らし合わせて検討



分析の結果

- ❁ 研究① HOJの文化を多様な立場から理解するようになった。
- ❁ 研究② マルチヴォーカルな学びを促す要因が明らかになった。

研究の結果

デザインされた環境における学生の マルチヴォーカルな学びのプロセス

- ❁ 1日目の調査を通して
- ❁ 小学生Jを取材していたグループから「ごはんを一緒に食べようと誘われたが、X(日本人スタッフ)から、ごはんは別々に食べるといわれたことを報告
- ❁ 中学生Mを取材していたグループは、「食事について取材をしているとき『一緒に食べたい』」というとMがとても喜んだ」ことを報告。



- ❁ 何故一緒に食事をしないのか？という疑問
 - ❁ 親のいない子どもにとって「食事」の意味って大事なのに何故別々なのか？
- ❁ そもそもX(日本人スタッフ)は、子どものことをどう思っているのか？

時系列

小学生

一緒にごはんを食べようと誘われる。しかし、Xから別々にしてほしいと言われる。

中学生

一緒にごはんを食べたいといったらとても喜ばれた

X

現地スタッフ

何故、食事を一緒にしないのか？
食事は「家族」としての重要な時間。

子どもが好む味が日本人に合わない。
健康的にも良くない。

Xは子どものことをどう捉えているのか？

時系列

小学生

中学生

X

現地スタッフ

Xは子どものことをどう捉えているのか？

学校で「お父さん」「お母さん」の名前を書くところにXの前任者の名前が書かれていたことを報告。

HOJで幸せ？という質問に対するMの反応（寂しそう）を報告

Xは子どもにとっての「親」には絶対ならないと発言
僕は「経営者」である。

子どもは親代わりを必要としていると理解。
子どもたちは寂しいを思いをしているのではないか？
何故、両親の代わりになってあげられないのか。

子どもの食事の際にはスタッフが常にそばについている。
現地スタッフが親かわり？

【既有経験との比較】
インドの孤児院では、代表者が親代わり

時系列

小学生

子どもは親代わりを必要としていると理解。
子どもたちは寂しいを思いをしているのではないか？
何故、両親の代わりになってあげられないのか。

最初はすれ違っていた学生たちの声が次第にお互いの声を取り込むようになり、多声性をおびていく。

子どもにとって実際の両親の存在も不可欠。

日本人スタッフと現地(フィリピン人)スタッフの役割とは何か？

どんなにがんばっても日本人の自分は親代わりにはなれない、なってはいけない、という気づき。

虐待されても捨てられても、子どもを親から切り離してはいけないという気づき。

子どもたちの生活を守らなければいけない責任感とプレッシャーについて知る。

家族から本来学ぶことをスタッフがサポート。
現地スタッフとの連携・関わりの重要性への気づき

子どもの食事の際にはスタッフが常にそばについている。
現地スタッフが親かわり？

中学生

X

現地スタッフ

時系列

小学生

どんなにがんばっても日本人の自分は親代わりにはなれない、なっではいけない、という気づき。

中学生

虐待されても捨てられても、子どもを親から切り離してはいけないという気づき。

X

子どもたちの生活を守らなければいけない責任感とプレッシャーについて知る。

現地スタッフ

家族から本来学ぶことをスタッフがサポート。
現地スタッフとの連携・関わりの重要性への気づき

多様な声によって、問いが再構築され、HOJの現実の捉えられ方が変容

孤児院のあり方と
問い直す

「家族」とは何か？

孤児にとって
必要なものは？

どう支援できるのか？

地域との関わり・連携した取り組みの重要性

日本人としての私ができること

海外からの(一時的な)ボランティアと子どもの関係性

成長(変化)のきっかけを知る
成長(変化)のきっかけを知る
成長(変化)のきっかけを知る

- ① マルチヴォーカル
② 多様な視点

Question
相手も
葛藤に
いるのでは?

みっちーの
声
「こないで」

女性
4人

日本人の女性の考えを
おしつけているのでは?
外国人のことを考えてるか?

みっちーとおん

うまうまい

マコ
みんな

さみしいんじゃない?

みっちーとマコ
おく

ムツミ
4人
同じじゃない?

10:10-10:15 1人
10:15-10:30 みんな
10:30-11:00

王ゆみ
いく?

ハルマ

③ ①と②をクリアして
ほしじゃない。
おんは言われたつも
言っていた。

内面的な声

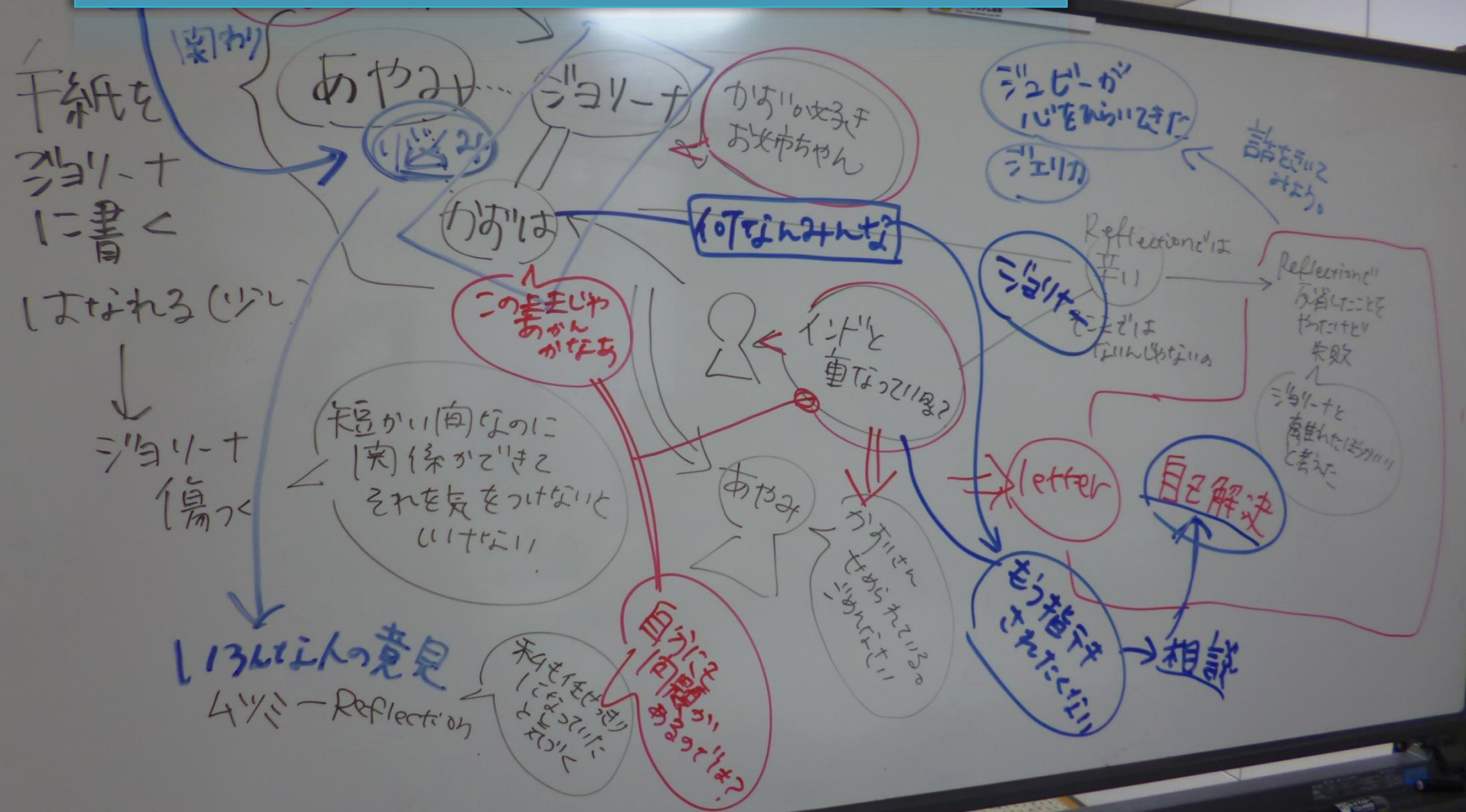
マコ 行って

最後まで
行ったから
いい

サッ

みっちーは
嫌がっている。
いつか
帰る
母

孤児院にいる子どもたちの間の関係性(兄弟・友達)



研究① まとめ

デザインされた環境における学生の マルチヴォーカルな学びのプロセス

- ❁ 学生は、マルチヴォーカルを通して、自らの観点を通して構築した現実を、他の学生の観点を交えることで、再構築したり、他の観点から現実を捉えたりして、HOJでの「現実」を多角的に理解していた。
- 1. 日本人スタッフの現地NGOでの役割
- 2. 海外からの(一時的な)ボランティアと子どもの関係性(関わり方)
- 3. 孤児院にいる子どもたちの間の関係性(兄弟・友達)
- 4. ローカルスタッフの役割と日本人との連携
- 5. NGOの役割と限界一地域との連携の必要性

研究② まとめ

学生の学びを促した要因

1. 対等な関係性
2. 尊敬する人との協働
3. 目的意識
4. 自分の役割
5. 自分の意見と他人の意見の齟齬

課題と展望

- ❁ 分析結果の了解性の継続調査
- ❁ 本研究では、HOJの現実理解に焦点をあてて、概念変化を分析した。
- ❁ 学生らのインタビューを通して、マルチヴォーカルな環境において学生が学んだことは、現実理解という認知面だけではなく、「責任感」「主体性(疑問を持って自ら探究する必要性)」「行動力(自らの意見を述べたり、態度で示すこと)」といったことである。

参考文献

- ❁ Bakhtin, M. Discourse in the novel. In M. Holquist (Ed.), *The Dialogic Imagination*, Austin: University of Texas, 1981, pp.259-422
- ❁ ジェイムズ クリフォード (1996) 『文化を書く』紀伊國屋書店
- ❁ 箕浦康子(2012)「異文化間教育研究という営為についての2、3の考察—パラダイムと文化概念をめぐる—」『異文化間教育』36号:pp.89-104.
- ❁ 白水始・遠山紗矢香(2012)「マルチヴォーカリティが育む未来への学び」*KEIO SFC JOURNAL*, Vol.12 No.2: pp.53-68.
- ❁ 工藤 和宏(2011)短期海外研修プログラムの教育的効果とは-再考と提言-ウェブマガジン「留学交流」2011 年 12 月号 Vol.9. 日本学生支援機構
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/kazuhirokudo.pdf>(2013.6.1.参照)